翻訳

新たに確認された「王陵変文」の一残簡

Victor H. Mair　（高井 龍　訳）

拙論 “Lay Students and the Making of Written Vernacular Narrative: An Inventory of Tun-huang Manuscripts”（*Chinoperl Papers*, No.10, 1981, pp.5-96。以下 “Inventory” と略称す）の目録ナンバー#599 は、従来知られざる敦煌出土「王陵変文」（注 1）写本の予備的紹介であった。私はそこで、その残簡の写真が入手でき次第、速やかに公にすると約束した。この簡潔な報告は、その遂行を意図したものである。

この残簡の所有者は、中国科学史研究の泰斗・潘吉星氏である。氏は私にこの残簡の記録・調査を快諾してくれたことから、1983 年 7 月 4 日、私は氏を北京に訪い、その機会を利用して残簡を撮影した。それは、セロハンの層によって保護されており、且つ眩しい太陽光の下で撮影せねばならなかったため、本論掲載の複写は、かなりの量に及ぶ不要な反射光によって損なわれている。

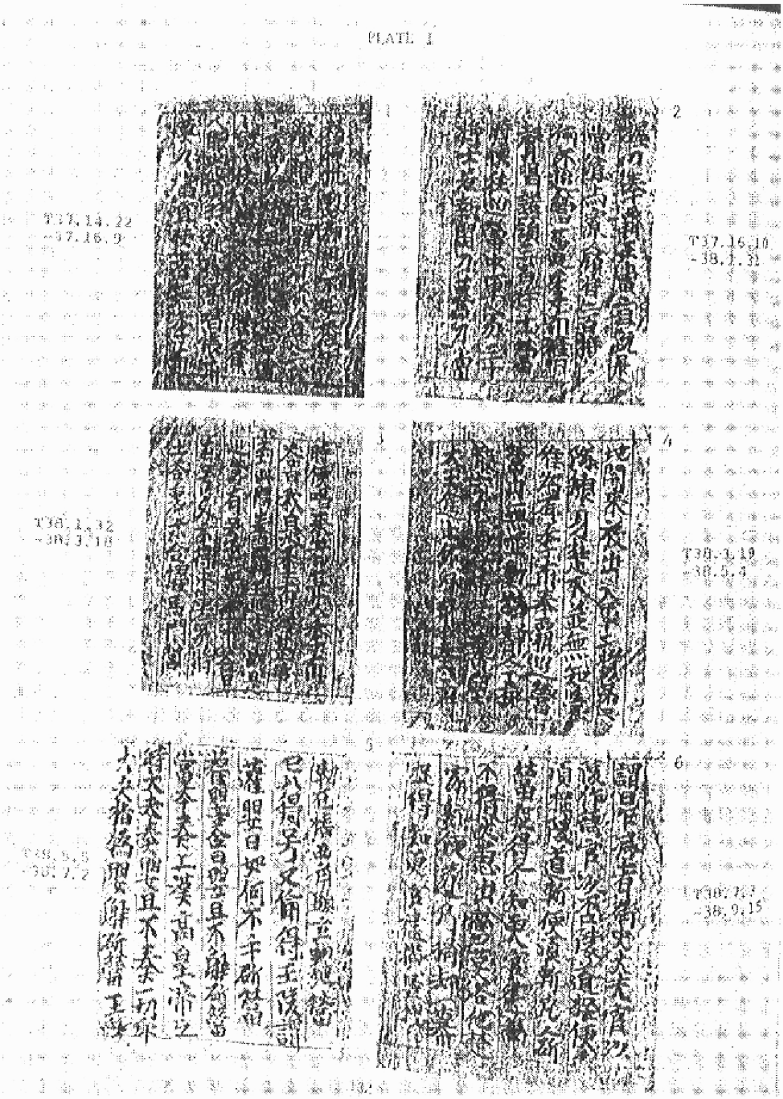
この残簡研究の第一の作業は、各頁を正しい順序に配列させることにあった。この残簡は現在、もと小冊子の状態から剥ぎ取られた 3 葉の横麻紙から成る。（各々平均高さ 8.3/4 インチ、幅 6.3/4 インチ。）各葉表裏に 2 頁ずつあり、併せて 12 頁となる。

すぐに気付いたことであるが、各葉の並びに特定の順序がないだけでなく、各頁を構成しているそれらの葉が、支離滅裂な状態で互いに接合されていた。個々の頁を正しい順序に並べると（Plate I と Plate II に見られる状態である）、この残簡＃599 は、以前は邵洵美氏の所有にして、現在は北京大学図書館蔵となっている “Inventory” #590「王陵変文」が擱筆したまさにその箇所（T37. 14. 21）（注 2）に接合することが判明した（T.37. 14. 22）。紙質、罫線、筆跡はどれも似た性質のもので、その接合された写本（#590/599）が五代（10

世紀）のものであることを示している。残簡#599 が北京大学図書館本と同じ冊子の一部であることに疑いはないであろう。ただ私は、それがどのように、なぜ分離したかについては思いをめぐらすつもりはない。

現存する他の「王陵変文」写本（P.3627［#147］、S.5483［#367］）に同じく、#590/599 は、恐らく敦煌の在俗の学生等が筆の練習のために手控えとして使ったものである。P.3627（各頁 5 行）は、整然さや筆跡から判断するに、3 点の写本の中では最良と言うには程遠い。それはまた、最も誤写が少ないとはいえ、それでも充分な識字能力を持ち合わせているものではない。S.5437（各頁 7 行）は、識字能力の面では P.3627 と#599 との中間に位置する。#599（各頁 6 行）は、学生になったばかりの人物の手に成るものだ。これは、誤写の検証からより明らかになるだろう（以下参照）。転写における誤写の性質やその残簡にある他の様々な側面から、#590/599 が P.3627 と S.5437 のどちらかを転写したものではないことも読み取れる。このことは、現在既に失われた「王陵変文」の写本が、少なくとも 1 点は存在していたこと、及び当該写本が口述を書き下ろしたものであることを示唆している。後者の可能性の見込みは比較的薄いとはいえ、このように判断する根拠は、以下の照合の表に幾分詳しくある（注 3）。

【PLATE I】



【PLATE II】

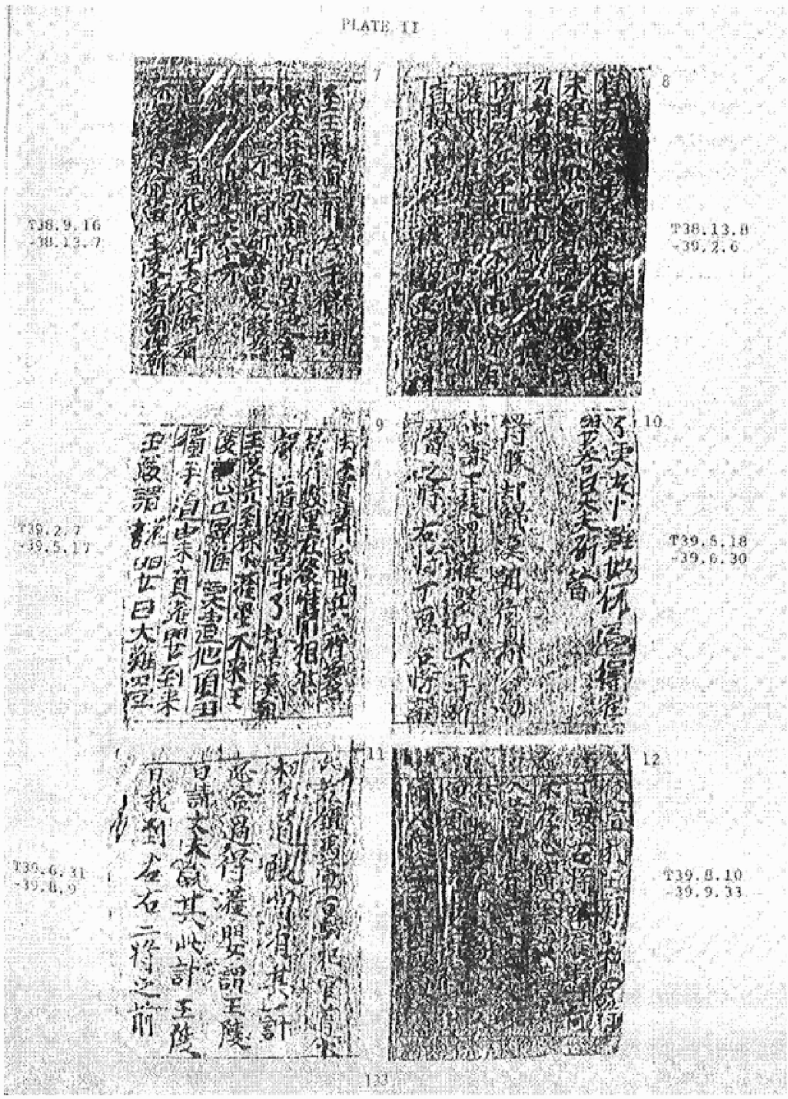


PLATE II
7
8
T38.9.16
-38.13.7
T38.13.8
-39.2.6
9
10
T39.2.7
-39.5.17
T39.5.18
-39.6.30
11
12
T39.6.31
-39.8.9
T39.8.10
-39.9.33
133

T 37. 15. 22

「合」。他の写本が「令」（正しくは「冷」）に作るのは#599 よりもよい。

37. 15. 25

「 」。S.5437 は「」（不明瞭）に作り、P.3627 は「」（不明瞭）に作る。#599 の綴りは、他の 2 点の写本よりも一般的な敦煌の綴りに近い。

37. 15. 35

「喝」（P.3627 のみ）の代わりに「唱」に作る。

37. 16. 2

「爲」。他の写本が「有」に作るのは#599 よりもよい。

37. 16. 26

誤って「三」を「二」に作る。

38. 1. 25

#599 の筆記者は誤って「各」を「若」に作る。

38. 1. 28

誤って「刀」を「」に作る。

38. 1. 34

「喝」（P.3627 のみ）の代わりに「唱」に作る。

38. 3. 15

S.5437 のみ「懼」の代わりに「 」に作る。

38. 3. 18

「 」を誤って「閭」に書写する。S.5437 は「閻」に読める。

38. 3. 23

P.3627 のみ「過」の字あり。

38. 3. 24

「大」を「入」に作り、完全に文意を損なっている。

38. 4. 6＋

「唯」と「有」の間に誤って「爲」の字を加筆する。S.5437 が「唯」の代わりに「爲」に作るのは、#599 ほど大きな誤りではないが、やはり非文法的である。

38. 4. 17-18

誤って「竝」と「無」とが転倒している。

38. 5. 11＋

解釈不能な「羽」を挿入している。P.3627 では、次の綴り（「地」） は行間の注記に加えられており、その字は小さい。

38. 5. 15

誤って「入」を「八」に作る。S.5437 の「入」は別の文字を強く上書きしているようだ。

38. 5. 29

「下」を「不」に作る。これでは文意が通らない。

38. 8. 1

P.3627 と#599 は、『敦煌変文集』編者が作る「個」の代わりに「个」に作る。S.5437 はこの字を欠く。

38. 8. 5

いずれの写本も「健」（健）に作る。『敦煌変文集』編者が誤読している「 」ではない。

38. 8. 6, 8-22

「斬」と「三段喚作厭（S.5437 は「 」に作り、P.3627 は「 」に作る。）兵之法」を書き落とし、その一節の対句構造と意味とを完全に損なっている。この欠陥は恐らく、手本にした写本のはじめの「官健」（38. 8. 4-5）から次の「官健」（38. 8. 21-22）へと、筆記者の目が飛ばし読みしてしまったために起こったのだろう。

38. 8. 34

全ての写本が「奸」を「姦」に作る。

38. 9. 11

38. 8. 5に同じ。

38. 9. 13

「駞」を書き落とし、その一節の対句構造と意味とを損なっている。

38. 9. 21

「陵」を書き落とし、該文の主語が曖昧になっている。

38. 9. 24-25

「攪髮（S.5437は後ろの「髮」字に解釈不能な「議」字をあてている）」の代わりに「攬（S.5437に同じ）頭髮」に作る。これは該文が備える四言としての韻律を損なう一方、その文体の口語性を強めている。

38. 9. 28

「抬（他の2点の写本は「擡」に作る）」の代わりに「擡」に作る。これが「握」を意味するならば、不適切な代用である。だが、恐らくこの筆記者は、『敦煌変文集』編者の校訂した如く、「抬」のもう1つの字形である「擡」を書写しようとしたのであり、それならばここで適切である。

38. 11. 7

「萬」の後ろに3字分の空白がある。#599のこの韻文形式には多量の混乱がある。他の写本が、多少なりともきちんと整えられた七言の対句を、各行の末尾で韻が踏むよう配列しているのに対し、#599はそのような配列を試みてはいるが、失敗している。

38. 13. 3

「擡」を「擡」に書く。他の2点の写本は38. 9. 28に同じ。

38. 14. 3+

P.3627と同じく、#599は「下」の後ろに余分な前接語「去」を挿入している。

38. 14. 7

「醒」の部首（「酉」）は、異なる人物の手によって小さく加筆されている。

38. 14. 9

「煞」(＝殺) を「 」に書く。S.5437 は「 」に作り、P.3627 は「 」に作る。後者は敦煌文献に散見される綴りである。

38. 15. 1

「暗」を「膳」に書く。

39. 1. 1-2

誤って「灌嬰」を重複書写する。

39. 2. 7

「事」を「 」(？) に書く。

39. 3. 13

誤って「煞」(＝殺) を「 」に書く。

39. 4. 6

間違って「了」を「子ト了」に書く。(訳者注……“ト”は削除の意。)

39. 4. 22＋

「」とまで書いたところ、それを黒く塗り潰している。

39. 4. 28＋

「他」の字を挿入し、該文の口語性が強められている。

39. 5. 12

「灌」の字の左側に余分な言篇が書かれ、黒く塗り潰されている。

39. 5. 33＋

1＋1/3 行を飛ばしている。文の中間に位置するこの箇所から別の新たな筆記者が書き始めたことによるのは明らかだ。

39. 6. 10

「少」は「小」に通ず。

39. 6. 24

迂闊にも「左」を「右」に書く。

39. 6. 27

（他の写本が）「 」に作るところを、間違って同音異義語の「要」に書く。

39. 6. 32

間違って「各」の代わりに「 」（つまり「若」）に書く。

39. 7. 1-2

「把却」の代わりに「 」（敦煌における「把」の一般的書写法）に作る。

39. 7. 6

「切」の代わりに「朷」に書く。両者ともに間違っており、「泄」に訂正すべきである。

39. 8. 19

「 」を「要」に書く。

39. 8. 22-23

「雍氏」と書こうとして「 （塗り潰されている） （＝齒）」と書いたものである。

39. 9. 1-2

『敦煌変文集』編者の校訂したように「三十」に作る。P.3627は「 」に作り、S.5437は「世（ママ）」に作る。

39. 9. 9

#599はここで「 」に作るが、他の2点の写本は上項に同じ。

#590/599の細読から得られる全体的な印象は、敦煌文献の「王陵変文」を書き下ろした者のうち、当該写本の写字生が最も未熟であることだ。時に、

ひどく拙劣な字、不注意による重要な節の脱落、非文法的で不要な字句の加筆、ほとんど基礎語彙さえ駆使できていないほどの識字能力、強い口語性の形跡、これらや他の要素の全てが、#590/599 が学生の手控えであったことを確信させるに足る。事実、幾名かの学生がこの系統の変文を書写するのに関わっていたらしい。#590 は明らかに複数人によって転写されており、#599 も、恐らくは複数の学生による。#599 は、第 1 頁から第 8 頁までが 1 人目の筆に成り、第 9 頁から第 10 頁の半分までが別の筆に成り（きわめて拙劣な筆である）、第 10 頁のもう半分から第 12 頁までが、3 人目の、より尖った筆に成る。写本中の書写の中断は、写字生の交替に関係しているのであろう。いずれにせよ、誤写の傾向は、私が他の箇所でも指摘してきた在俗学生の写字生という指摘に合致する（注 4）。#590/599 の慎重な評価が読者に提示しているのは、書写媒体における口語識字能力を得ることに並の成功を見ようとするだけの学者等が遭遇する陥穽である。そしてそれは、往々にして、古典学者等が目指してきたものでもある。

［注］

1. この一部の翻訳と要約とは、Eugene Eoyang 氏の “Word of Mouth: Oral Storytelling in the Pien-wen”（Bloomington, Indiana: Indiana University Ph.D. dissertation, 1971）の pp.115-140 に見られる。Eoyang 氏の結論は、「王陵変文」の 3 つの小冊子を専門の語り手の台本と見做す立場にある。だがそれは賛同しかねるものだ。それは一般的な見解ではあるのだが、本質的な修正が求められるのである。実のところ、Eoyang 氏は、小冊子がメタ・フォームズ（meta-forms）——恐らく単なる口頭表演の台本から未熟な学生の読み物テキストへの発展過程にあるものを言う——であると示唆しており、台本説に距離を置いてはいる。だが私はそれとは対照的に、多くの変文写本が在俗学生の写字生による著述であるとの仮説を、広範囲に亙る根拠を示して他の場所でも提示してきた。拙論の “Inventory”、*Tun-huang Popular Narratives*（Cambridge University Press, 1983）の序文と注釈、更に重要なものとして、*T'ang Transformation Texts*（Harvard University Press, 1989）の第五章を参照頂きたい。また、白化文氏の「甚麼是變文」（拙訳 “What

is pien-wen?”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol.44, No.2 (Dec., 1984), pp.493-514.）とも関わりが深い。
2. Tは『敦煌変文集』（人民文学出版社、1957年）を指す。当該論文の用法は全て“Inventory”のそれに一致する。
3. これらの注記は#599に限ったものである。他の文献への参照は、主に#599の状態を示すために行った。他に注記していない場合、S.5437とP.3627に対する『敦煌変文集』の読みは基本的に正しいものと認められる。簡略化された文字、多形字、繰り返しの記号等は、#599の性質を明かすのに必要とされる場合のみ照合に含めた。
4. 上掲注1の後半参照。

［訳者解題］

これは、Victor H. Mair氏（1943－）による“A Newly Identified Fragment of the “Transformation on Wang Ling”” (*Chinoperl Papers*, No.12, 1983, pp.130-142）の翻訳である。ここに、今から約30年前に執筆された論文を翻訳するに至った経緯を、簡潔に述べておきたい。

本論の著者Victor Mair氏は、現在ペンシルヴェニア大学・東アジア言語文明学部の教授として教鞭を振るわれており、敦煌学のみならず、絵解きや考古学など、その研究分野は多岐に亘る。敦煌学に限っても、*Tun-huang Popular Narratives*（Cambridge University Press, 1983）、*Painting and Performance*（University of Hawaii Press, 1988）、*T'ang Transformation Texts*（Harvard University Press, 1989）等の著書があり、後二者は既に中国語訳が出版されている。そして敦煌変文の英訳である前者は、入矢義高氏の翻訳とともに「従来の内外の訳注書の最高峰」であり、「今後変文を研究する人にとっては、避けて通れぬ必読書」とも評されたほどである。（『大乗仏典』〈中国・日本篇〉第十巻〈敦煌Ⅰ〉、中央公論社、1992年、pp.452-453。）

そのMair氏が、今からおよそ30年前、個人所蔵文献に確認された「王陵変文」の調査を行い、その影印・校注を附し、併せて氏の変文に対する見解を簡潔にまとめたものが本論である。この変文は、宋代以降の俗文学の源流として、今に至るまで識者が盛んに研究を進めている分野であるが、当該文

献は、その紹介より約30年を経た今も、充分には斯界に認知されていない。*Chinoperl Papers*が入手困難な雑誌であることにも一因があろう。当該文献が今後の変文研究に利用されることを願い、この度の翻訳に至った次第である。

なお、この「王陵変文」の画像は、*Chinoperl Papers*掲載写真をそのまま転載した。残念ながら、著者・訳者ともに、これ以上鮮明な画像の入手が現在のところ困難であったための措置である。今後原巻写本を閲覧し、より鮮明な写真を撮影できたならば、新たに斯界に提供したく考えている。

最後に、当該論文の翻訳を快諾して下さった著者に、厚く御礼申上げる。